

遠くの空に消えた

2007(平成19)年7月17日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本＝行定勲／出演＝神木隆之介／大後寿々花／ささの友間／小日向文世／鈴木砂羽／伊藤歩／長塚圭史／田中哲司／柏原崇／石橋蓮司／大竹しのぶ／三浦友和／特別出演＝張 震 (ギャガ・コミュニケーションズ、powered by ヒューマックスシネマ配給／2007年日本映画／144分)

……行定勲監督が7年間温めていた、夢・UFO・奇跡をキーワードとし、3人の子供たちを主人公にしたオリジナルの物語が今、大公開！ 舞台とテーマは、馬酔村における空港建設反対闘争。そんな生々しいテーマを、ファンタジー色いっぱいの不思議な雰囲気仕上げたのはさすが。年金問題や格差問題でカネ、カネ、カネと騒ぐのもわからないではないが、たまにはこんな映画で夢の世界に浸ってみるのもいいのでは……？

やっぱり、オリジナルが……

この映画は『GO』(01年)、『世界の中心で、愛をさけぶ』(04年)、『北の零年』(05年)、『春の雪』(05年)の行定勲監督が書きあげてから7年間あたため続けていたオリジナルストーリーを遂に映画化したもの。プレスシートによれば、その動機は2つあったらしい。

その第1は、ベストセラーの映画化なら当たるという論法が映画業界に確立しつつある中で、やっぱりオリジナルを撮りたいという想いがまた自分の中で強まってきたため。またそれを後押ししたのが、台湾の侯 孝^{ホウ・シャオシェン}監督や韓国のキム・ギドク監督から「なぜ、オリジナルをやらないんだ？」って言われていたこと。そして第2は、現在の天才子役であるとともに1993年生まれである神木隆之介と大後寿々花が大人になる前に撮らなければ「これはもうタイムアップするぞ！」という思い。

行定勲監督自身の子供のころの体験を取り入れたオリジナルストーリーのテーマはUFOを軸とした奇跡、そしてストーリーの核となるのは子供たちの出会いと友情。

もっとも、それだけでは童話的な夢物語になってしまうところ、そこに大きな社会性をもたせたのが空港建設反対紛争という生々しい大人たちのドラマ。「映画はもっと自由であるべきだ！」を合言葉とした行定組の『遠くの空に消えた』という今回のオリジナル作品は、何やら夢がいっぱいで面白そう……。

これはいつの時代の物語……？

この映画の時代設定は不明だが、空港建設のために空港公団の団長楠木雄一郎（三浦友和）が赴任してくるのだから、多分1960～70年代のはず。つまり、行定勲監督が生まれた直後で、日本の高度経済成長はエンドレスだと信じられていた時代。そんな時代状況の中、過去3人の担当者が挫折した空港建設用地の買収という任務を背負った楠木が、相当な覚悟でやってきたのは当然。

一見紳士風だが、空港建設反対派のリーダーである地主の天童（石橋蓮司）らが氣勢をあげているBAR「花園」に乗り込み、何ともすごい演説をぶって一万円札をばらまくという行動はかなりのもの。単なる堅物官僚やサラリーマン担当者では到底できない芸当で、これなら反対派として天童に従っている小作人たちの懐柔も進みそう……。

2人の男の子の対決は……？

プロローグの後、映画はそんな楠木が運転する車が馬酔^{まよひ}村に到着するシーンからスタートする。楠木の妻、すなわちこの映画の主人公となる亮介（神木隆之介）の母親がなぜいないのかもよくわからないが、こんな激務の任地に一人息子を連れてくる楠木の根性は相当なもの。もっとも、転校してきた小学校でサワコ先生（伊藤歩）の紹介でクラスメイトに対してあいさつをする亮介の姿を見ていると、これも相当なタマで、一筋縄ではいかない雰囲気がありありと……。

そんな都会からの転校生に一目ボレしたのは、それまで悪ガキの大将だった土田公平（ささの友間）のクラスの女の子たち。これが気に入らない公平は直ちに亮介に対してイチャモンをつけて宣戦布告し、決闘に及んだが、そんな勝負は牛の肥溜めへの落下で引き分けに。子供の世界がすばらしいのは、そんな対決的出会いだったにもかかわらず、その勝負を境に2人が大の親友になったこと。

こんな経験はきっとあなたにもあるはずだから、それをもっと大切にしなければ

……？

核となる女の子は……？

『天国は待ってくれる』(07年)でも『その時は彼によろしく』(07年)でも、子供たちの3人グループは男2人、女1人と決まっているもの……？ きっとそれは、そういうパターンが1番落ち着きがいいから……？

そんなわけで、仲直りした2人が牛のウンコにまみれながら歩いている時目に入ったのは、両手を広げ空に向かって呪文を唱えている少女ヒハル(大後寿々花)の姿。呆気にとられて「何をしているの？」と尋ねる2人に対して、ヒハルは「君たちはUFOの存在を信じる？」という突拍子もない質問を。実はこんなワケのわからない出会いとワケのわからない質問が、この映画全体を貫くテーマ……。

反対派にも〇〇派と△△派が……

日本で有名な成田闘争を見ても、反対派が一本にまとまらず〇〇派と△△派に分かれるのは世の習い。したがってこの映画でも、天童を中心とする地主プラス小作連合の反対派と、トバ(田中哲司)を中心とした青年団のちょっと粋がった反対派(?)の二派に分かれたのは仕方ない……？ しかしそれが、楠木にとっては反対派切り崩しの格好の材料になったのは当然……。

さて、空港建設のために赴任してきた楠木と、これに反対する天童やトバたちとの抗争の展開は……？

秘密の丘でのヒハルの言葉は……？

反対派住民に対する父雄一郎の強引な札束攻勢によるパフォーマンスを見た亮介は、父親を責め、「それがお母さんが家を出ていった原因だ」と主張したが、所詮大人と子供……。父親から頬を一発殴られれば、亮介には家を飛び出していくしか方法がなかった……。

行定勲監督はそんな亮介の姿を描く中、映画だからこそできる偶然の出会いを重ねていくことに。すなわち、まず第1の偶然は、飛び出していた亮介が偶然公平に出会うこと。そこで公平からの「親は選べないよな」という慰めの言葉を聞きながら、2人で登った丘の上で星を見ていると、突然「ここ、私の場所よ」という声が……。

そう第2の偶然は、この丘は昼間に2人が見た少女ヒハルが、何やら重い荷物を背負っていつも来ている場所だったということ。ヒハルが背負っていたのは“星が採れる望遠鏡”。すなわち、この望遠鏡で流れ星を見てスイッチを回せば、流れ星のカケラが採れるというわけだ。田舎のガキ大将の公平はすぐにそれを信じて「僕にもやらせて！」と飛びついたが、都会育ちの亮介が疑いの目でヒハルを見たのは当然。

ところが、そんな亮介に対して、むきになって真正面から「パパが嘘つくはずないじゃない」と悲しみの混じった目で見つめるヒハルの姿を見て、亮介も彼女の言葉を信じることに。そんな秘密の丘で一緒に“星が採れる望遠鏡”を眺める中、亮介、公平、ヒハルの3人の間には、かけがえのない友情が生まれることに……。

サワコ先生の物語はちょっとふくらましすぎ……？

この映画には、佐々部清監督の『カーテンコール』（04年）で印象的な演技を見せた伊藤歩が担任のサワコ先生として登場する。彼女は実は天童の一人娘で、親から決められた結婚を迫られている状態だが、森の中で出会った純真で不思議な男性ミス提督（チャン・チェン）に魅かれている様子。したがって、映画後半にはBAR「花園」で盛大に挙げられる彼女の結婚式において、映画『卒業』（67年）を半分彷彿させるようなシーン（？）が登場する。

これはこれで物語の一翼をになっていることはまちがいないが、結果的にこの映画が2時間24分という長い時間になったことを考えれば、編集ではこのサワコ先生の物語をふくらませすぎと考えて、大胆にカットしてもよかったのでは……？

キーマンは赤星！ こちらは絶対必要！

それに対してこの映画のストーリー構成上のキーマンとなるのは、ひと昔前はだいたいどのクラスにも1人はいたと思われる知的障害の子供がそのまま大人になったというイメージの赤星（長塚圭史）。彼がどこでどんな収入を得ているのか全くわからないが、1人鳩を飼って悠々自適の生活を送っている様子……？

しかし知的障害の大人だから、トバたち青年団からはバカにされていじめられているうえ、子供たちからもからかわれているのは少しかわいそう。しかし、この手の「知的障害の大人」は亮介や公平そしてヒハルたち純真な子供たちとはちょうど知的レベルが同じで、感性も同じだから（？）、きっかけさえあれば友人になれるもの。



©2007 遠空 PARTNERS

鳩の気持（特性）を理解し、その優秀さを亮介たちに伝える赤星は嬉しそうで、たちまち4人は意気投合することに。

しかし、空港建設反対をめぐる、新たに楠木雄一郎が登場してくる中、いろいろと策をめぐらせたトバたちはその策略実行のターゲットを知的障害の赤星に定めたから大変。その結果、いかにも善良で夢のような映画の中に、たった1つだけ血生臭い事件が発生することに……。とにかく、この赤星はこの映画のキーマン。したがって、彼をめぐる物語を編集でカットすることは絶対にできない相談……。

この名セリフをしっかりと！

この映画は奇跡をテーマとし、夢を現実にしようとする子供の心を描いたファンタジー色いっぱいの映画。そこで、そんな奇跡を象徴する名セリフが、何回か語られる。少し長いですが、名言だし何かの時に使えると思うのであえて紹介しておこう。それは

「知ってるかい？ 蜂は航空力学的に言えば、飛べる構造じゃないらしいんだ。なのに、実際は飛んでるだろ。何故だと思う？ 蜂は飛ぼうと思ったから飛べたんだ。信じることで願いが叶う、人はそれを、奇跡と呼ぶんだ」というものだ。

名セリフの著作権者は……？

この名セリフの「著作権」をもつ(?)のは、映画後半に登場する、公平の父親で

ある生物学者の土田信平（小日向文世）。ある1つの虫の研究のために家族を置いたまま1人アフリカに行ってしまったという浮世離れした学者バカの典型のような信平が、ある日ひょっこり「ただいま」と馬酔村に戻ってきたから、公平も母親のスミ（鈴木砂羽）もビックリ！『半落ち』（03年）や『それでもボクはやってない』（06年）での裁判長役がぴったりだった小日向文世だが、こんな信平役を雰囲気タップリに演じているのはさすがベテラン演技派俳優。もっとも、ちょっとした夫婦ゲンカを見せたり、サワコ先生の結婚式における花嫁離脱劇（？）で大きな役割を果たした妻スミとはちょっと年が離れすぎでは……？ 1972年生まれの35歳だから、まだまだ美女役を十分にやれる鈴木砂羽に公平の母親役で1954年生まれの小日向文世の妻役をやらせたのはちょっとかわいそう……？

それはともかく、後半に至ってこんな個性豊かな生物学者信平が馬酔村に舞い戻ってきたため物語はさらに複雑になり、上映時間が長引くことになるが……。

仲良し3人組は子供だけではなく……

信平が馬酔村に舞い戻ってきた後、空港建設反対闘争などという政治問題には全く興味のなさそうな信平が、意外にも大きな役割を果たすことに……。それは彼の生物学者としての立場からだが、村人をバックに空港公団団長の楠木雄一郎に対して語りかける演説には大いなる説得力がある。

そして、この演説を聞いて、カンのいい観客なら信平と雄一郎との間には何らかの親しい関係があると感じられるはず。そう、実は雄一郎は信平から「クスクス」というあだ名で呼ばれて一緒にこの馬酔村で育った同級生なのだ。そして実は、このBAR「花園」のママもその同級生。そのうえ実はママは信平がホレていた女性だったことがちょっとした会話の中で判明するから、そんな面白いシーンにも注目を……。

したがって仲良し3人組は、亮介、公平、ヒハルだけではなく、亮介と公平の父親である雄一郎と信平そしてママたちも同じ。そんなアツと驚く（？）人物関係が展開される中、札東で小作人たちを落としていくという雄一郎の強引なやり方は、なお続けられるのだろうか……？

この映画にして、この音楽あり！

この映画で後半すごい貫禄を示すのが、BAR「花園」のママ役の大竹しのぶ。も

っとも馬酔村のような小さな村にこんな立派な BAR が1軒だけあることはホントは不思議なのだが……？

最初にこの BAR が登場するのは、反対派の集会のシーン。天童がちょっと時代がかった口調で自己陶醉気味に空港建設反対のアジ演説をするシーンは結構面白い。そしてもっと面白いのが、そこでみんなが歌う団結の歌。それは、普通はインターナショナル……？ また、五木寛之の『青春の門』（81年）ならデモ行進の歌は赤トンボの歌……？

ところがこの映画では、誰もが耳にしたことがあるメロディー。これは元々はアイランド民謡で『プリパ』という曲らしいが、クソ田舎の BAR には超一流の楽団が入っており、立派な演奏を。ちなみに、行定勲監督はこれに『馬酔村の歌』というタイトルでユニークな歌詞をつけているから、なお一層面白い。この曲はこのシーンだけでなく、この不思議な雰囲気映画全編で数回流れるから是非注目を。

クライマックスの奇跡は麦畑上に……

この映画のプレスシートの表紙には奇妙な模様が刻まれた旗が……。空港反対派には前述の団結の象徴となる歌があるものの、赤旗のような団結旗がないのはちょっと不満……。しかして、このプレスシートの旗は、大人たちの闘いのための団結旗ではなく、公平たち子供たちの秘密組織の団結旗……？

それはともかく、大人たちの世界では雄一郎の札東による切り崩しに負ける小作人が出てきたため、子供たちもそんな大人たちの争いに否応なく巻き込まれていくことに。さらに局面が混乱する中、トバたち青年団は、去る7月19日の新聞記事で92歳で死亡したと報道された、日本共産党の宮本顕治氏が1955年の「六全協」において切り捨てた極左暴力主義者のようになってしまったから大変……。すなわち、ある日、赤星が飼っていた鳩小屋が誰かの手によって荒らされ、鳩はすべて無残な姿に。そして、それが雄一郎のせいだとトバたちから吹き込まれ、拳銃を手渡された赤星によって、雄一郎は何とその銃弾に倒れてしまうことに……。

この殺人（未遂）罪の成否については、刑法総論で学ぶ間接正犯の理論の勉強が不可欠……。さらに秘密の丘が誰かの手によって荒らされたことを発見したヒハルも、丘の上から転落して足を骨折してしまうことに……。さあ今や、馬酔村はそんなこんなの大混乱。こんな無茶苦茶な状況子供たちは黙って見ているしか手がないのだろ

うか……？

いやそんなことはない！ 秘密基地の補修作業をしながら亮介と公平の2人は、「奇跡って待ってても起きないんだろ？ だったら俺たちの手で、奇跡起こそうぜ！」と決意！ そこで立ちあがったのは、公平を指揮官とした子供たち。さあ美しい満月が輝く夜、空港建設予定地の麦畑に子供たちはどんな仕掛けをかますのだろうか？ そしてそれによってどんな奇跡が……？ M.ナイト・シャマラン監督の『サイン』（02年）（『シネマルーム2』237頁参照）を彷彿させる、馬酔村の麦畑上において展開される奇跡とは……？

プロローグとエピローグの、きれいなスチュワーデスは誰？

この映画のプロローグは、ある日、小さな空港に小さな飛行機が降り立ったところから始まる。タラップの下で「ご搭乗ありがとうございます」と語りかける2人のスチュワーデスに見送られながら乗客は1人ずつターミナルの方へ歩いていったが、スチュワーデスがふとそちらの方向を見ると1人の若者が地面にしゃがみこんだまま。そこで「お客さま、どうかなさいましたか？」と若い方のスチュワーデスがかけよってみると、コンクリートで固められているはずの空港の敷地に片足のくつが埋まったままになっている様子を若者が凝視していた。さらにつけてきた先輩を含めた2人のスチュワーデスに対して「君たちは奇跡を信じるかい？」「僕の話聞いてみる？」と若者は語りかけたが……？

この若者はなぜこの空港に降り立ったの……？ そして、そのくつは一体ナニ……？ ここから始まるファンタスティックな奇跡の物語は……？ 本編の物語が終わると、スクリーンは再び2人のスチュワーデスと若者の場面。スチュワーデスに話し終えた若者に対して、「お～い」と声をかけてきた2人の男女に向かって若者は駆けていったが、この若者は一体誰……？ そして声をかけてきた2人の男女は一体誰……？ この映画はひねったミステリーものではないから、それは映画を観ればすぐにわかるのでご安心を。

こんなネタばらしになるようなことを最後に書いたのは、あの若い方のスチュワーデスがえらくかわいくて気に入ったのに、女優の名前がわからないため。あの若い方のスチュワーデスを演じた女優は一体誰……？

2007(平成19)年7月21日記